

風の末裔シリーズ・3rd シーズンの9

～ 続・スピカ ～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

砂の民の部落の外れ。

砂漠で一番勢力のある部族だが、こんな端っこひなびた山あいは、住む者も少なく喉かなものだ。

柴を背負って下って来るのは、蒼い髪を頭のとっぺんで束ねたモエギ。手には麻の背表紙の古い擦りきれた書物。

「おやおや」

聞き慣れた声に顔を上げ、娘は素直に顔を輝かせた。

「おっさん!!」

「いつからそんなに勉強熱心さんになったんです? 足元を見ていないと転びますよ」

蒼の長が馬から下りながら、モエギを見て本当に嬉しそうに微笑んだ。

「これ…、勉強なんて、そんな大そうな書物じゃない。ただ読んでいて心地良い。砂漠と山里の詩歌。爺さんと婆さんが貸してくれている…」

長が麻の表紙をじっと見つめて動かないので、モエギは訝いぶかしげに言葉を切った。

長はサラリと視線をモエギに移した。

「息子の読んでいた書物でよければ…って?」

「ああ、そう、うん…」

柴は馬が引き受けてくれて、二人は並んで山道を下った。

「まったく、びっくりしましたよ。里に来たら貴方がいないんですもの」

「…カワセミを叱ったりしていないよな。私は自分の意思で里を離れているんだ」

モエギは言葉使いは変わらないが、いつもの攻撃的な感じが消えて、ゆっくり優しいげになっていた。これが、焦りや義務感の荷を下ろした、素のモエギなんだろう。

「皆、待っていますよ。貴方がいないと、本当に寂しい…」

長は『で、何か掴めましたか?』とかの、取って付けた質問はしなかった。そんな事聞かれたって、言葉に出来る答えはない…っていうのを分かっていた。

「寂しい? ガッツ者がいなくなると、せいせいしているんじゃないのか?」

「まさか…。私だって寂しいし、ナナなんて、折角次の任期は長めに取ったのに、きつと到着した途端、夕陽に向かって砂漠を裸足で駆け出す程ガツカリしますよ」

「はは…」

村外れの家の側で、長は馬から柴を下ろしてモエギに渡した。

「なあ、おっさんが来たって事は、カワセミとエエは帰っちゃま

うのか？」

「その予定だったんですが…」

「……………」

「いえ…、出発は四、五日後になると思います。何にしても、

ユコが貴方に逢いたがっていましたよ。多分あの二人の駐在は今回限りになるし、帰る前に一度逢ってやって貰えませんか？」

「今回限りの？…私のせいにか？」

モエギは顔を曇らせた。

「いえ、全然別な理由です。カワセミの身体はやはりシエット気流に乗るには無理があったんです。あそこまでダメージを受けるとは、私も予想していませんでした」

「…え…？」

「あの子は子供の頃から身体が弱くってね。術の力でカバーしていますが、どうにも出来ない事もあるんです」

「…そうだったのか…」

氷みだいに冷たくなった言…。

「言ってくればよかったのに…」

「駐在者が不調だという事実を、万が一にも外に洩らしちゃいけないって思ったんでしょ？」

モエギはユコの明るい顔を思い出した。術のかかったお守りが足の踏み場もなく並べられた部屋。本当は不安で心配で一杯

だったのか…。

「カワセミはね、ぶっ倒れている時間が起きている時間よりも多くって、長になかなかねっこない…ってよく言われました」

「…おっさん？」

「まさか、ここまで立派になってくれるとは思いませんでした。カワセミの存在その物が、私の喜びです」

「……………」

「カワセミだけじゃありません。最初から完璧な長なんていませんでした」

その時モエギは漠然と…、いつか自分もこのヒトにそう言われる存在になりたい…、このヒトの喜びになりたい…！ そう思った。そしてそれが、彼女のそれからの大きな原動力となる。

近々、西風の里近くまで行って二人に逢う…という約束をして、モエギは蒼の長を見送った。

柴を納屋に片付けて母屋に戻ると、気配がおかしいのに気付いた。いきなり戸口が開いて、モエギは思わず後ずさった。

地上に出て来た閻魔様かと思える大男は、砂の民の総領だ。西風の小娘をギロリと見下ろす閻魔様の後から、罰悪そうなハトゥンと、おろおろした老夫婦が出て来た。

「西風の総領娘よ、砂の民の部落に勝手に住み付くとはどうい

う了見か？」

「総領殿……」

「普請の約束はしたが、まだ正式に同盟も結んでいない。何か申し開きがあるか？」

モエギは言葉に窮した。本当の事は言えない。両部落はまだどっち付かずの關係だ。この老夫婦が西風の総領娘と血縁があるなんて明るみに出たら、彼等の部落内の立場を波立てる。

「親父、このヒトはただのお節介なの。根っからの世話焼き気質なんだ」

「お前に聞いていない!!」

ハトゥンはしゃっくりしたみたいに黙らされ、モエギはカラカラに乾いた口を開いた。

「ただ年寄りだけの家が気に掛かって、立場もわきまえず手出ししてしまった。申し訳ない……」

「では、立ち去って貰おう。部落の年寄りは部落の者が面倒を見る。今後も心配は無用だ」

「親父、若い者ももう仲良くやってんだ。正式に同盟を結んでいいじゃないか」

「お前は肝心な事が見えていない!!」

総領は地の底から響くような声で一喝し、その場の者は縮み上がった。

「今、西風の里に力があるように見えるのは、蒼の里からの駐留者が世話をしているからだ。本当の意味で西風の里が一人立ち出来なくては、我々が同盟を結ぶ価値は無い」

「本当の意味とは……、私が母者のように、この土地の風を制する力を持ち、蒼の里の助けを必要としなくなればいいのか？」

一生懸命問いかける娘を、総領はまた一蹴した。

「お主は浅葱(あさぎ)殿のような術者になれるのか？」

「……………」

「お主はお主の器量で長となる道を探れ。里の者も、浅葱(あさぎ)殿におんぶに抱っこ時代とは変わって行かねばなるまい」

「親父、そんな悠長な事言ったり……」

「ヒヨッコが黄色いくちばしを挟むな!!」

総領の一喝で再び一回縮み上がったが、モエギだけはすっくと立って、閻魔様の恐ろしい目玉を見据えた。

「いつになるかは分からない。けれど私は西風の里と共に在る。必ず皆と一緒に里を立ち直らせる。その時、対等の立場でお逢いに来る」

「おお、極上の酒を用意して待っておるぞ」

閻魔様は初めて笑った。

\*\*\*

モエギは納屋の横の自分の馬を引き出し、ふと思いついて、

お婆さんの所へ引き返した。懐から麻の表紙の書物を取り出す。

「これ、ありがと…」

「返さなくていいよ、モエギちゃん」

「婆さん？」

「この書物が好きだって言ってくれたでしょう？ 前の持ち主

もきつと、書物は好きなヒトの所に在るのがいいって思っているよ…」

黙っていたお爺さんは、いきなり家に取って返した。どうするのかと思っていると、残りの書物…数冊ばかりだが、まとめてモエギに手渡した。

「持って行ってくれ。ワシ等はあなたに何のお礼も出来ん…」

モエギは書物を抱えて、暫く止まった。それから目をしばたきながら、総領を振り向いた。

「私もこのヒト達にお礼がしたい。少し時間を頂けるか？」

総領は意外にあっさり頷いた。

モエギは、背筋を伸ばし、息を吸って目を閉じた。そうして、詩歌の一つを朗々と暗誦し始めた。何度も読み返して胸に刻まれた、春を迎える山峡(さんきょう)の詩。

老夫婦は静かに聞き入り、ある時点で雷に打たれたような衝撃を受けた。亡き息子がそこにいるような錯覚に襲われたのだ。

あの子と同じ、スカシユリを思わせる、明るいオレンジの瞳…。

詩歌は春間近の山の空気にきれいに溶けた。ハトウンも、そして総領も、黙って聞いていた。詠み終えると、モエギは老夫婦の手を握り、総領に礼をして、馬に跨り飛び去った。

去り行く娘を見送って、総領は厳しい顔を緩めてハトウンに言った。

「同盟は対等に結ぶべきなのだ。どちらかが情弱だと、ただ支配されるだけになる。そうなってしまつては、儂だつて浅葱殿に顔向け出来ん。解るな」

「ああ、俺まだまだ甘チャンだ。アイツに置いていかれちまう」

「全く……憎まれ役はいつも、儂だな」

そして、まだ動揺冷めやらぬ老夫婦に向いた。

「すまぬ事をした」

「は、はい……？」

「お主らが幸福ならば、良い事なのだ。しかし総領としては、やはり西風の娘がここで暮らすのを、見過ごす訳には行かぬ。それにあの娘は、前へ前へ進まなくてはならん。いつかまたそなた達の所へ戻るかもしれぬが、今は次の階段を登る時なのだ」

「そうなのですか…」

老夫婦は娘の去った空を見上げた。

「では、私達も祈りましょう。あの子が目指す者になれますように、いつも、想っていますように」

「気の長い話だよなあ」

「ハトゥンは両手を頭の後ろで組んで一緒に空を眺める。

馬鹿息子には解らんか……。総領は目を細めて山谷を見回す。

シンとした冬山の見た目は変わらないが、空気は明らかに和らぎ、木々は目覚め、生き物が動き出している。今しがた、急にだ！ あの子と酒を酌み交わせる日は、そう遠くはなからう……。

西風の里から少し離れた砂漠の岩山のてっぺんで、モエギはすくと立っていた。胸に当てた手の中に、何か握っている。風が強く吹いて、振り向くと水色の髪の妖精が馬と共にいた。

「ボクに何か用……？」

モエギの手の中は、橙だいたい色の珠の付いた櫛だった。

「この石を握って強く呼び掛ければ伝わると思って」

「伝わるけれど、そんな便利に使われても困る……」

カワセミは相変わらず突き放した言い方だが、モエギにはもう解っていた。このヒトが困ると言ったら、ただただ困っているだけなのだ。心が冷たい訳じゃない。だって、こうして来てくれているじゃないか。

「言いたい事があって」

「手短に頼む」

「身体は、もう、いいの……？」

「絶対調って訳でもないけれど、こうして眼は開いているな」

「……すまない」

「……何が？」

「まだ不調だったのに、沈んでしまった私を呼びに降りて来てくれた。ああいうのって、消耗するんだろう……？」

「……まあな……」

「それで折角回復しかけていたのが、また寝込む羽目になっていたんだろう……？」

「……」

「すまない……」

「そんなに、謝られても困る……」

「んん、じゃあ、……ありがとう……」

「……」

「ありがとう」

「……ああ、……まあ……」

「それと、『自分の為に、何か出来た』……と、思う」

「そうか……」

「それだけだ、じゃあな」

馬に手を掛けるモエギに、カワセミはボソッと言った。

「良かったな…」

「…ん」

「これからどうするの？」

「まだ、里へ帰れる程の者に成れていない。暫く一人になる。

砂漠の隠れ場所は幾つか知っているから、大丈夫だ」

「ユコが逢いたがっている」

「うん、帰る前」一度逢いに行く。その時はまだ呼んでいいか？」

「ああ…」

馬に跨がって片手を挙げ、去って行くモエギを見やりながら、カワセミは口の中でボソボソ呟いた。

「ヒトに物を教えるなんて金輪際ゴメンだ。ユコで懲りてる。

放っとけなくて、一生教え続ける羽目になる。でも……キミの背中なら、ちょっと位、押しでもいい…」

水色の妖精は馬を飛び立たせ、西風の娘を追った。

\*\*\*

鼻の頭も見えない漆黒の砂漠。

細いカンテラを頼りに、トボトボ歩く二つの小さな騎馬があった。一人がグラリと傾く。

「ソラ、おい、ソラ〜！ 寝るなよ、しっかりしろ！」

「は、うう……」

馬を寄せて顔を叩くシドに、ソラはやっと生返事をした。

「砂漠ってこんな簡単に迷っちゃうモンだった？」

「しょうがないよ。こんな星の無い夜は、砂を渡る旅商人だって出歩かない」

「でも……」

「シドだけのせいじゃない。僕だって、何も考えずに飛び出しちゃったんだ」

モエギが失跡した事に聞かして、カワセミもユコも何も教えてくれなかった。頼みの蒼の長も、モエギを信じて待ちましようの一点張りだ。

二人は、普請に来るハトウンにカマをかけてみた。モエギは多分ハトウンの身近にいたと思ったからだ。

「ねえ、ハトウン様。モエギ様が着替えを必要にしているから、揃えてハトウンに渡しときなさいって蒼の長様が」

「え…？ それ、いつの事？」

「えと…ちょっと前」

「変だなあ？ モエギが部落を出た事は、長にも伝えただけだけど？」

「ハトウン様の側にいると思っていたから安心してたのに!!!」

暗闇の砂漠でシドは親指の爪を噛んだ。

「ハトウン様は知らないんだ。長様達だって…。モエギ様は、

皆が頼りにするから、平気な振りをする癖がついているだけで、本当はめちゃめちゃ寂しがりな怖がりなんだ」

「こんな真つ暗な夜、独りぼっちで、どんなに心細くしているだろう」

そう思うと二人、居ても立ってもいられなくなって、既の夜飼いを急ピッチで済ませて、里を抜け出したのだ。今すぐモエギの側に行つて、寂しくない状況にしてあげたかった。

モエギの居付きそうな森や風穴を探してみようとしたけれど、地形の変わりやすい砂漠であっさり方向を見失った。ミイラ取りのミイラだ…、情けない…。

「飛んでみるか」

「こんな真つ暗な中を」

ソラは、シド程には馬で飛ぶのは上手じゃなかった。

「焚き火の明かりが見えるかもしれないよ」

「…うん…」

二人は思い切つて大きくジャンプした。それでも地上に何も見えない。

「もう一っだ」

シドは馬を駆つて更に二段三段と跳んだ。

「ま、待って…」

ソラは慌てて着いて行くつもりだったが、暗闇の恐怖が先に来た。

恐怖はすぐ馬に伝わる。馬は不安で横つ飛びし、バランスを崩したソラは、鞍から滑った。

「あっあっ…わあっ!!」

相棒の悲鳴にシドが慌てて引き返そうとした時、身体が持つて行かれそうな強い風が吹いた。

「ソラ——?!」

かろうじて馬の背にしがみつきながら振り向いて、息を呑んだ。

蒼い長い髪をなびかせて、モエギの騎馬が風の中真つ直ぐに浮かんでいた。腕の中に、硬直したソラ。

「大丈夫だ。じつとしていろ」

静かに言つて、ふわりと……本当にふわりと、地上へ降下した。まるで草の馬みたいだ…。

「何をしているんだ？ こんな所で」

モエギにケロリと聞かれて、二人は答えに窮した。

「道に…迷つて…」

ソラが小さい声で言つた。

「そうか、まあ、星が無いもんな。…待ってろ」

モエギは下馬して二人から離れ、砂原の少し高い所にすうつと立った。唇から流れるのは、砂漠の星夜の詩。



風がモエギの側に集まり、意志があるようにうねってから、  
一気に八方に広がった。

二人は茫然と眺めていた。

風の中、緋色のマントをはためかせるモエギの姿が不意にく  
つきりした。天上の雲が流れて星が現れたのだ。

詩歌を詠み終え、オレンジの瞳が振り向いた。

「これで帰れるだろ」

二人は茫然としていた。本当にモエギ様なのだろうか？ 砂

漠の妖魔が見せる幻覚なんじゃないか？

「シド、ソラ!!」

名前を呼ばれて二人ビクツとなった。

「どうした？ 腹減ってんのか？」

やっぱり…、本物のモエギ様だあ!!

「モエギ様っ…!!」

「モエギ様あ〜」

二人は駆け寄って、両側からモエギの袖をしっかりと掴んだ。

何の事はない。寂しかったのは自分達だった。

「…バカ……………」

モエギは袖を掴まれたまま、じっとしていた。それから一回

鼻をすすった。

「風…使えるようになったんですか？」

少し落ち着いたシドが聞いた。

「ん…、『使える』ってのとはちょっと違う」

二人はモエギの話し方が、以前と全く違うのに気が付いた。

別人のように静かで穏やかだ。

『風を流す』って感覚はまだ分からない。ただ、他人だった  
ヒトが、心が分かり合えて友達になれたように、風が近くにな  
った。友達だから、頼みも聞いて貰えるし、行きたい方向が分  
かって、手助けも出来る」

「……………」

二人は予想外な事実には戸惑った。こんなにいきなり、モエギ  
様が別人みたいに凄くなっているなんて、思いもしなかった。

喜ぶべき所なんだけれど…。

モエギがどんなに平凡でも自分達は付いて行くつもりだった。

例え里の誰が認めなくても、自分達には、大好きな浅葱様の娘

……長様なのだ。

ところが、いざ風が使えるようになると、心の準備が出来て  
いなくて…、そう、置いてけぼりになった気分だった。

「里へは戻る。ユユにも逢いたいしな。だが今晚はもう少しこ

こで風と話していたい。お前達は、お帰り」

すつきりと言つモエギに、二人は何も言えなくて、素直に馬  
に跨がった。

二人がちゃんと、里の方向へ向いたのを見届けて、モエギは再度風を起こして舞い上がった。砂漠へ来てから…、眠っている時間以外は、殆ど風の中に身を委ねて詠うたっていた。

まったく不思議な切っ掛けだった。老夫婦に貰った書物の詩歌がモエギの心を開き、能力を開いたのだ。

——幸せになりたい。幸せにしたい。大切なモノたち——  
詩歌はそんなモエギの想いと共鳴した。まるでモエギの為にこの世に存在したように。

それを教えてくれたのは、カワセミだった。

「キミはもう扉の真ん前まで自力で辿り着いていた。答えも手の中にしていたんだ」

\*\*\*

砂の地平に赤い月が昇る。何かの欠片(かけら)のような、下弦の三日月。

月明かりに長い影を落とす西風の里を見下ろして、カワセミとユウの二頭の騎馬が浮かんでいた。

さっきまで真っ黒な空だったのに、今は満天の星空。何処かで誰かが風を流したんだろう。

「アタシ、ここが好きだわ…」

「うん…」

「明日でさよならなのね」

「うん…」

「よおく目に焼き付けて置くわ」

「うん…」

カワセミは馬を寄せて、鞍に差していた一枝の花をユウの膝に乗せた。

「あら…」

池の対岸の砂地に咲く、薄緋色の山茶花(さざんか)。

「頑張ったアタシに、ご褒美？」

「…それでいい」

「うぶぶ…」

ユウは嬉しそうに花を髪に差した。

「ここではこんな乾いた土に咲く花があるんだな」

「強い、土地ね」

「来てよかった…」

「…でしょ」

その足許の地上に小さな灯りが揺れ、二人の少年が里に帰り着いた。馬繋ぎ場には蒼の長がいた。二人を見て、咄めるでもなく、大きなポットを掲げて言った。

「馬乳酒を沸かし過ぎました。一緒に飲んで下さい。あちち…」

早朝…、西風の里の馬繋ぎ場に、長の娘が降り立った。そんなに離れていなかったのに、えらく久しぶりな気がする。

朝の厩仕事の途中だったシドとソラは、道具を放り出して駆け寄った。

「あ・あ・あ…本物のモエギ様だあ」

「よかった、夢じゃなかった…モエギ様あ〜！」

「貴方達、モエギに甘えるのはもうおしまいにするって誓った所でしよう」

蒼の長が宿の方から歩いて来た。

「おっさん…」

蒼の長は相変わらずモエギの修行の成果は聞いて来なかった。

関心が無いのではなく、既に見えているんだろう。

長はニコニコと、二人の少年を前面に押し出した。

「モエギに報告する事があるんでしよう」

「あつ、は〜」

二人は畏かしくまってモエギの前に並んだ。

「僕達…、西風の里を離れます」

「えっ?」

「蒼の里へ行くんです」

「ええっ?!」

「長様が鬮牙の馬を貸して下さい。二人乗りで、カワセミ様達に着いて、連れて行って貰える事になったんです」

モエギはビックリ仰天して、長を見た。長は静かに二人の肩に手を置いた。

「カワセミとユユに報告を受けて、気付かされたんです。この二人の可能性に」

モエギはビックリ目のまま、少年達に視線を移した。

「蒼の里には剣を交える事で相手と心を通わせる事の出来るノスリ長がいます。シドにきくと学べる物があるでしょう。ツバクロが秘書を欲しがっていましたし、ソラにはツバクロにくっ付いて、ありとあらゆる外交の場を経験して貰いましょう」

「僕達、きっと西風の里に役立つ者になって帰って来ます」

モエギ様が自分達を置いてけぼりにするんなら、追い掛けて追いつけばいい。蒼の長が学ぶ場所をくれた…、自分達は何て幸運なんだろう！二人は希望に満ちた目をしている。

「そうか…。うん、行って来い。身体…大事にな…」

モエギはそれだけやっと言った。

自分の中のこの二人の存在の大きさに初めて気付いた。寂しいなんて言っちゃいけない。二人は遙か先を見ている。自分も同じ未来を見据えよう。

「貴方は……」

蒼の長は微笑みながらモエギに向いた。

「『おかえりなさい』…で、いいんですか?」

「ああ…」

モエギはちよっと左右に目をそらしてから長を見た。

「ただいま」

丁度、朝の見回りからユコが戻って来た。モエギを見るや、抱き付いて、ああ、良かった…良かった…と、何度も呟いた。

モエギさんのいない西風の里なんて、アクロバット飛行をしないお父さまみたいなモンだわ…と、よく分からない例え話をして、一人で笑った。

帰還の挨拶と勝手をした詫言を入れに来た長の娘に、老人達はさして嫌味は言わなかった。っていうか、気持ち悪い位優しくかった。

集会所を後にしてモエギは宿屋に向かった。

蒼の長が受付のカウンターで何かを読み耽(ふけ)っている。

さっきモエギに借り受けた、麻の表紙の書物だ。

「おっさんに面白いかな?」

「ええ、まあ…」

長は顔を上げずに答えた。

奥の部屋ではユコが、シドとソラに手伝って貰って荷造りに

大わらわだ。帰りはカワセミの身体と二人の少年の為に、日数をかけて低空を行くので、多くの荷物は持てない。

皆がくれた贈り物のどれも削れないと、ユコの悲鳴が廊下まで聞こえて来た。

カワセミがふらりと部屋を出て来た。付き合いきれないって顔だ。モエギを見てちよっと目を細めてから、長の手の中の書物を覗き込んだ。

「凄いい言霊の嵐でしょ…」

「ええ………」

「こ・と・だ・ま…? やっぱりこれって呪文集みたいな物か? 魔法書だったのか?」

「…いえ…」

長はやはり顔を上げずに答え、カワセミが続きを請け負った。「呪文だとしても使えるのはキミにだけだ。これはキミだけの為の言霊だから」

「え…?」

\*\*\*

天上に小熊座と大熊座がゆっくり追っ駆けっこしている。

窓を開けてそれを眺める青年に、傍らの木の上から声を掛ける者があった。

「夜風で冷えますよ。またご両親に心配を掛けますよ」

見上げる梢には北極星を背景に、群青色の長い髪の男性が腰掛けていた。彼女(かのヒト)の幼馴染みだという、東の国の蒼の妖精…。

「手紙を言付かって来ました。後、蜜柑の蜂蜜漬け」

妖精は体重がないようにふわりと降りて、窓の珊に腰掛けた。

「僕は大丈夫ですよ。今日は気分がいいんです。それより、貴方が冷えちゃう。こんな寒い夜に、わざわざ有難う」

青年は窓際のベッドに半身起こし、手紙と小さな瓶を受け取って、毛布を妖精の膝へ延ばした。

サイドテーブルには薬湯と沢山の薬草。また少し痩せたようだ…。青年のオレンジの瞳を縁取る窪んだ眼窩から目をそらすと、枕元の筆記用具が目についた。

「ああ〜…」

青年は慌てて麻の表紙の雑記帳を枕の下に隠して、はにかんだ。

「恥ずかしいから駄目です」

「…日記?」

「違っけれど…」

「…?」

「何となく書いています。何となく…」

長はそれきり忘れていた。

モエギが生まれるちょっと前の、遠い切ない記憶…。

砂の民の部落の片隅で、病床の青年が、逢えるかどうか分からない我が子を想って書き綴った、山野や砂の原の詩。

何も出来ずに見ているしかなかった砂を噛むような当時の自分を思い出しながら、蒼の長はページを繰った。

青年の命はとても細く、身体はどんどん蝕まれていたのに、文字は美しく力強く、風や音や光を孕(はら)んでいる。どんな術や魔法力だって及ばない力が、この書物には秘められていた。年老いた両親には無理に起きて書いている姿は見せなかったんだろう。こんな書物が存在した事は、長も浅葱も知る所ではなかった。

カワセミがナチュラルに導き、モエギが自分で辿り着いた。本当にこの子供達には敵わない…。自分の誇りであり、喜びだ。

蒼の長が書物に夢中で何だかウルウルしているの、モエギは宿の戸口を出て外に立った。

明日から新しい毎日が始まる。いなくなる顔が多いけれど、寂しがつている暇はない。頑張らなきゃ…。

ふと見ると、離れた壁にカワセミがもたれていた。

「今、部屋に入ると手伝わされる…」

モエギを見て苦笑いする。モエギもちょっと笑った。

「可笑しいな」

「何が…?」

「蒼の長は、あなたと私は出会った瞬間バトルになる…って言うていた」

「ああ…、お互い、元気な状態で出会ったらそうなるっていたかもな」

「お互い弱っていてよかったな」

「はは…」

朝の雲が里の上空に集まる。モエギは左手を、カワセミは右手を挙げた。二筋の風が交差しながら雲を流して行った。

「あのみ…」

「…何?」

モエギは言いかけて黙ったが、カワセミには彼女の願いが分かっているようだった。

「ボクは、弟子は、取らない…」

「…うん、…そうだろうな、分かっている。あなたの弟子は、後にも先にもユウコ一人だ」

「……………」

「あそこまで導いて貰ったんだ。十分だ」

「…ああ…だけねど…」

「……………」

「キミは、ボクの、弟子を名乗ってもいい」

「……………」

「弟子っていうのは、師に教わるだけじゃない。時として、師と共に成長させてくれたりする。そういう意味で、キミはボクの二番目の弟子だ」

「随分、尊大だな」

「そうか?」

「有り難くて涙が出るぜ……………」

二人は青く澄んで行く空を眺め、部屋ではまだユウコの賑やかな声が響いていた。

馬繋ぎ場では、今までで最高の人数の見送りが集まった。

殆どがユウコの見送りだ。西風の娘達、砂の民の男衆が、ユウコを取り囲んで口々に話し掛けている。

弾き出されたカワセミの横には、モエギがいた。

「もう、逢う事もないだろうな」

「何でそう決め付ける? キミが蒼の里まで飛ぶ力を身に付ける可能性だってあるし…」

「……そうなるかな?」

「ボクが干されてヒマになる可能性もある」



「あはは、そうなければいいな」

ヒトの群れからハトゥンが、二人の少年によって引っ張り出された。

「……？ よ!! ちびっこナイト、頑張れよ」

「もう、ちびっこじゃないですよ」

「ああ、そうか、そうだな。だから行くんだもんな」

「予約を取り付けておこうと思って」

「……？ 何の？」

「決闘の」

二人は声を揃えて言った。

「はっ」

「僕達が一人前になって帰ったら、順番に決闘して下さい!!」

「モエギ様に申し込む権利を掛けて!!」

「……………」

ハトゥンは目をパチクリさせた。

「モテモテですねえ、モエギは」

蒼の長が楽しそうにシドとソラの肩に手を掛けた。

「じゃあ、それまでハトゥンにはモエギとの婚儀は待って貰い

ましてよ」

「待って待って！ 勝手に話を決めるな！」

「長様、本当ですか？ 約束してくれませんか？」

「ええ、私がバッチリ監視しています。もし勝手に進展しそうになったら、私が責任持ってぶち壊しますから」

「……ごらあ!!」

蒼の長は、心底楽しそうに笑った。西風の里と関わって、本当に笑う事が多くなった。

そう、自分達はただ奉仕してただけじゃない。この子供達に、娘達に、砂の民達に、モエギに……どれだけ多くの物を買っただろう。それは、ツバクロも、ナナも、ユユも、カワセミも、きつとそうだ。

長は丘の上の、殆ど出来上がった修練所の建物を見上げた。

もうすぐあそこで子供達が学ぶ。

子供達は成長し、そして……蒼の里の援助は要らなくなるだろう。それは、喜ぶべき事なのだ……。

「おっさん!!」

モエギに呼ばれて我に戻った。

「皆もう旅発つ。シドとソラに祝福してやってくれ」

「ああ、はいはい……」

少年達は白テンの帽子を取って、長の前にチョコンと並び、ユユは更に増えたパンパンの荷物をもと馬にくくり付け、カワセミはもう乗馬して、鷹のように前方を見据えている。



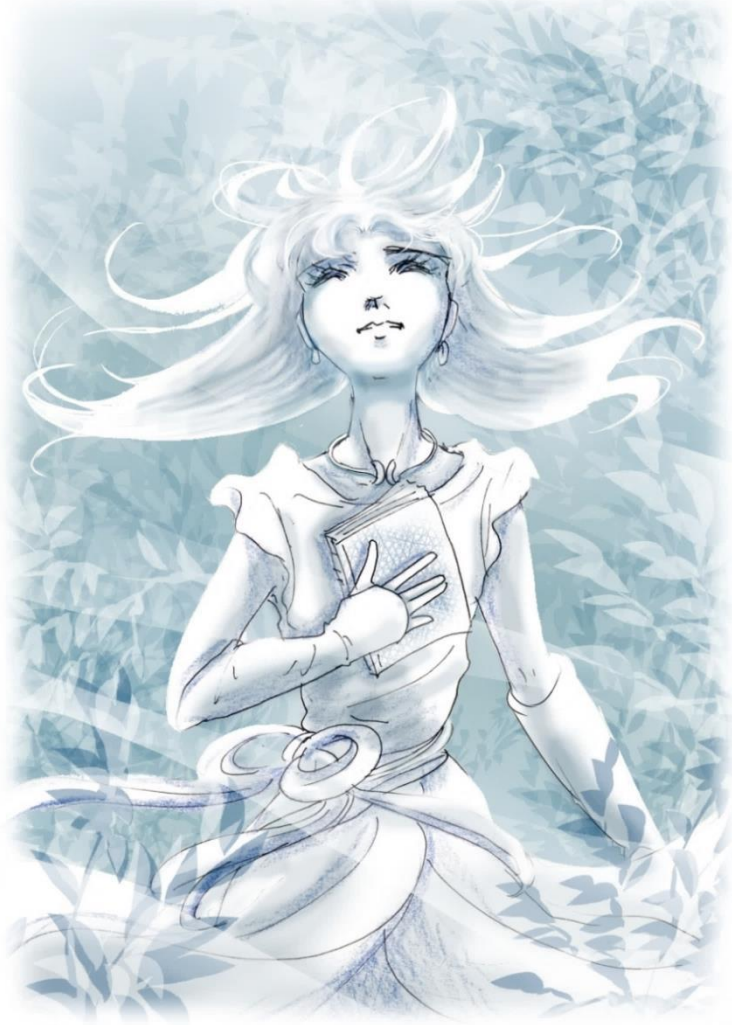
先の事でもんまりするのほやきょう。しんみりはその時になっ  
てすねばいい。

長は心を込めて祝福し、三騎が砂の地平に小さくなって消え  
るまで皆で手を振った。

夕空にモエギの流した風は、一番星のスピカを連れて来た。  
西風は優しい星々の詩を孕(はら)んで、砂丘の空に拡がった。

～おしま～

二〇一〇・一・二五



お疲れ様でした  
読んでくれてありがとう

初版 2015・3・3

改訂版 2015・7・20

西風 そら

～ホームページ～

<http://members3.jcom.home.ne.jp/4109sxyz/>

～メッセージ～

<http://ameblo.jp/sinnrii/>

theme-10047795318.html

